第１回MD-PhDコース近況報告会を開催しました

医学部54期　石澤（井澤）有紀

第１回MD-PhDコース同窓会および近況報告会を，平成28年２月13日（土）に開催致しましたのでご報告申し上げます。2003年度の開始以来，合計16名の学生が本コースを選択しています。卒業生たちが徳島で全国で，そして基礎研究に臨床にと活躍の幅を広げはじめている現在，今一度同窓生相互のつながりを強めることを目的に同窓会を立ち上げることとなりました。

第１部：同窓会総会

本コースの卒業生・現役生の内10名が久しぶりに顔を合わせました。本会を私たちのホームとして，今後も交流・情報交換さらには情報発信を継続していくことを確認しました。会員は各学年1-2名ずつで構成されており，大学院進学以降どうしても孤軍奮闘となりがちです。今後現役生の大学院生活や学部復帰後のサポートも，本会を通じて行っていけたらと考えています。

第２部：近況報告会

まず勢井宏義教授から，現在の徳島大学医学部における基礎研究を取り巻く教育制度についてご説明いただきました。その後現役院生はハイレベルな研究発表を，学部生はこれまでの研究成果に加えて学部に復帰しての所感や今後の進路について報告しました。社会人は現在の業務内容を中心に，大学院で学んだことを生かして臨床・研究の現場で研鑽している様子を紹介しました。さすがに本コースで幾度となくトレーニングを受けてきただけあり，いずれも極上のプレゼンテーションでした。２時間はあっという間に感じられ，大いに刺激を受けました。学内で事前に開催通知をしていただいたため，基礎研究や私たちのキャリア形成に興味を持ってくれている学生さんや事務の方など９名が，休日にも関わらず参加してくれました。今後も本報告会は学内に広く公開して開催する計画です。

第３部：懇親会

場所を膳屋蔵本店に移し開催しました。大学院時代の生活ぶりを想いかえしたり，今後の展望について語り合ったり。改めて明日へのモチベーションに繋がりました。参加してくれた学部学生にとっても，MD-PhDコース進学者の生の声を聴く良い機会になったのではないかと思います。

参加者現況（H28年4月現在）（敬称略）

石澤有紀（54期）
　　徳島大学大学院医歯薬学研究部薬理学分野
　　助教

川添僚也（55期）
　　国立精神・神経医療研究センター
　　神経内科　上級専門修練医

荻野広和（56期）
　　徳島大学病院　呼吸器・膠原病内科
　　特任助教

黒川　憲（60期）
　　三井記念病院　消化器内科　後期研修医

赤池瑶子（62期）　倉敷中央病院　初期研修医

三橋惇志（62期）　都立駒込病院　初期研修医
西　　晃（医学科６年）　徳島大学医学部医学科
狩野静香（医学科５年）　同上
酒井遙介（博士課程３年）　微生物病原学
藤本将太（博士課程２年）　消化器内科学
西條早希（博士課程１年）　病態生理学

研究者養成を目的とした同様のコースは全国の医学部においても設置されておりますが，10余年に渡って継続的に入学者を認めるのは徳島大学のみとなっています。これも一重に先輩諸先生方のご支援あってのことと心より感謝申し上げます。また今回の同窓会立ち上げ及び報告会開催に際し，苛原稔医学部長，玉置俊晃教授，勢井宏義教授，赤池雅史教授，西村明儒教授，医学部後援会会長・福井清教授，青藍会事務局の皆様方にご尽力いただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

これからも我々徳島大学MD-PhDコース同窓会会員は『初心』と『リサーチマインド』を忘れず精進して参ります。青藍会の皆さまの変わらずのご指導ご支援を賜りますよう何卒宜しくお願い致します。

準会員だより

狩　野　静　香
青　木　秀　憲
野　口　拓　樹
島　田　大　揮

MD－PhDコースを修了して

医学科５年　狩　野　静　香

私は，2013年３月で医学科４年生を修了後，MD-PhDコースに進学し病態生理学分野（旧ストレス制御医学分野）の六反一仁教授のもと，３年間基礎医学研究に携わりました。MD-PhDコースを修了後，本年度より医学科５年次に復学し，臨床実習に励んでいます。この場をお借りして，MD-PhDコースを修了するにあたっての感想を述べさせていただきます。

MD-PhDコースとは，先進的な医学・生命科学の研究活動に必要な高度の研究能力と豊かな学識を備えた研究者を育成することを目的としています。本学のMD-PhDコースでは，医学科４年次を修了後，大学院博士課程に進学し，３～4年間の研究活動を経て医学博士(PhD)の取得を目指します。修了後は，医学科５年次に復学し，残りの課程を修了後，医師国家試験を経て医師免許(MD)を取得します。研究に興味のある医学生には，ぜひMD-PhDコースへの進学も視野に入れていただければと思います。

私が基礎医研究に興味をもつきっかけとなったのが，医学科３年次での研究室配属でした。一年間，六反一仁教授の教室でお世話になり，右も左もわからない私に実験手技の基本から，データの扱い方，論文の読み方，プレゼンテーション方法まで丁寧にご指導くださり，毎日が新しい発見でわくわくした気持ちで過ごしていた思い出があります。そして，４年次ではさらに研究に打ち込んでみたいという思いが強くなり，MD-PhDコースに進む決意をしました。

MD-PhDコースでの３年間の研究生活は，常に新しいことへ挑戦を続ける日々でした。研究に没頭でき大変恵まれた環境であり，思考，視点は非常に貴重なものを得ることが出来たと思います。実験を繰り返す中で仮説と現象がつながり，さらに新しい発見へとつながる過程は非常に刺激的な瞬間でした。順調に進むときもあれば，うまくいかない時期もあり，行き詰ったこともありました。気持ちばかりが焦り，先へ進めることばかりを考えて，無力感にかられることもありました。そんな時に，「目の前のことを丁寧にしなさい」という六反一仁教授の激励をうけ，あきらめず，あせらず，立ち止まらず，地道に続けることの大切さを教えていただきました。先生方のあたたかなご指導のもと，無事に学位審査を終えることが出来ました。３年間の間には多くの国際学会，国内学会で研究成果を発表する機会も頂きました。学会で国内外の最前線で活躍する研究者たちと意見交換をすることができたことは，たいへん勉強になり，研究を続けていくモチベーションとなりました。また，研究費の申請もさせていただき，研究者として働く上での基礎を学ぶことができました。

現在は５年次に戻り，臨床の勉強をさせていただいております。臨床に戻るにあたり不安もありましたが，MD-PhDコースでの経験が非常に大きな力になっていることを実感しております。今後も，臨床実習に並行して研究を続け，成果を残せるよう尽力してまいりたいと考えております。

最後になりましたが，MD-PhDコースで就学するにあたり，玉置俊晃前医学部長，苛原稔医学部長，青藍会の皆様をはじめ支援いただきました多くの方々，３年間にわたりご指導をいただきました六反一仁教授をはじめとする病態生理学分野の皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。